

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2020 年度
氏名	日高 音緒	指導教員 (主査)	杉本 希映

論文題目	内的作業モデルを要因としたパーソナリティ障害傾向が自他への攻撃性に及ぼす影響
------	--

本文概要
<p>パーソナリティ障害 (personality disorder ; 以下 PD) が有する内的経験および行動の持続的様式は、広範な影響を及ぼすと言われている (Beck, Freeman, & Davis, 2004 井上・友竹監訳 2011)。各 PD の自滅的思考および否定的認知を形成する要因の 1 つとしてアタッチメントが指摘されている (例えば市川・村上, 2016)。Bowlby (1973) はアタッチメントが自己像や他者像の表象として内在化したものを内的作業モデルとした。Bartholomew & Horowitz (1991) は、この内的作業モデルを自己評価と他者評価の 2 次元構成という視点で研究をした。この自己評価は見捨てられ不安と、他者評価は親密性の回避とそれぞれ対応するとされる (川原, 2019)。見捨てられ不安と親密性の回避の高さは、特に境界性・自己愛性・演技性・依存性・回避性 PD の症状と関連している (Bender, Farber, & Geller, 2001 ; Brennan & Shaver, 1998)。市川・村上 (2016) の研究では、境界性・回避性 PD 傾向が否定的な自己評価と他者評価を根底にし、抑うつの高さに寄与することが明らかとなり、発達の観点を含めて PD のメカニズムを検討する重要性を示唆している。また各 PD は攻撃性とも関連が示されており、先行研究では PD によって向けられる攻撃性の方向性が異なることが示されている。そこで本研究では先行研究を基に、各 PD 傾向の根底要因として不安定な自己評価と他者評価の内的作業モデルが存在し、PD 傾向を媒介して自己と他者への攻撃性に与える影響の仮説モデルを作成し、検証することを目的とした。</p> <p>自己評価と他者評価の内的作業モデルが各 PD 傾向を媒介し、自他への攻撃性に及ぼす影響の仮説モデルを作成し、共分散構造分析を実施した結果、境界性 PD 傾向は愛着関係における自己評価との間に関連があり、自他への攻撃性に影響を及ぼしていたが、愛着関係における他者評価と関連が見られず、仮説は部分的に支持された。また、自己愛性・演技性 PD 傾向は否定的な自己評価・他者評価と関連しないことが明らかとなり、仮説は支持されなかった。一方で、依存性 PD 傾向は愛着関係における自己評価と関連し、自己への攻撃性に影響を及ぼすこと、回避性 PD 傾向では愛着関係における自己評価と他者評価と関連し、自己への攻撃性に影響を及ぼしていたため、仮説は支持された。</p> <p>共分散構造分析の結果から、一部の PD 傾向が内的作業モデルという発達の要因が根底にあり、攻撃性に寄与していたことが示していた。このことから PD を、特性という生来的な要因と、養育者との関係性という発達の要因の相互作用といった観点から検討することの重要性が示唆された。また、幼少期の重要な他者との関係性を知ることは、心理療法の場面での予測や対応に役立つことから (長沼・大西, 2007 ; 上野, 2010)、本研究の結果は PD 傾向を持つクライアントの自傷他害への介入に対する知見を提供できたと考える。</p> <p>本研究ではいくつかの課題も挙げられた。共分散構造分析の結果、自己愛性・演技性 PD 傾向と内的作業モデルとの関連が市川・村上 (2016) の研究結果と異なっていた。その要因として、男女の被験者数に差が見られたことが挙げられる。今後 PD 傾向の研究では、性差を含めた検討をする必要があると考えられる。演技性 PD 傾向に関しては、肯定的な内的作業モデルが影響を及ぼしていたこと、自己愛性 PD 傾向には遺伝的要因も考えられることから、発達の要因とは別の観点からも研究することが必要であると考えられる。さらに本研究では健常群である大学生を対象にしていた。今後は、臨床群を対象とした調査をする必要性や幼少期から成人に至るまでの縦断的な研究を行い、より詳細な因果プロセスを検討する必要がある。</p>